

文化講座「特殊研究講座」

平成 21 年度

10 月 31 日（土）「いのちを大切にすることを育む」

NPO 法人いのちをバトンタッチする会代表 鈴木 中人氏

1. いのちをみつめる意味

- ①心の土台
 - ・ 祈る
 - ・ 道徳
 - ・ 先人の思い
- ②根っこを育む
- ③みつめる意味

2. いのちの授業

- ①体験談
- ②大切にしたいこと
 - 生き抜く
 - 支え合う
 - ありがとう

3. いのちを育むために大切なこと

- ①愛情＝愛されている実感
- ②死に向き合う
- ③いじめ、自殺
- ④いのちのつながり
- ⑤いのちの願い

人間社会学部研究会（平成 21 年度）要旨（初等教育学科関連）

平成 21 年 9 月 30 日

チンパンジー乳幼児とヒト乳幼児における比較発達

専任講師 中村 徳子

ヒトとヒト以外の動物、とくにそれらの発達過程を比較することで、ヒトの本性を知ろうとする学問が比較発達心理学という分野である。本発表では、チンパンジー乳幼児を比較対象とし、ヒト乳幼児とその発達の過程を比べることで、ヒトやヒト以外の霊長類にも認められる特徴やヒトだけに見られる特徴を探った。

まず姿勢の発達について比較した。どちらも生まれたばかりの時は、自分の力で体を動かすことがほとんどできず、うつ伏せにされるとうつ伏せのままである。その後、可能になる時期に多少の違いはあるが、首がすわり、上体を起こし、寝返りができ、お座りができるようになるといった発達の方向性・順序性は非常に類似している。しかしその後は、ヒトは歩くことよりもより安定して座ることを発達させるのに対して、チンパンジーは座ることよりも歩くことの発達を優先させていく。

愛着の発達についても両者は非常に類似していることがストレンジ・シチュエーション法をチンパンジーに適用することによってわかった。つまりチンパンジー乳幼児は特定の相手に対しては愛着行動を示し、見知らぬ人に対しては「人見知り」をするなど、ヒト乳幼児と同様の愛着の発達が認められた。

次に認知発達についての比較だが、鏡を見て、それが自分だとわかるかどうかという鏡映像認知に関しても両者の発達は類似しており、チンパンジーも鏡映像認知が可能である。

笑顔の発達も類似していて、両者とも生後すぐに新生児微笑が見られ、その後 3 ヶ月ぐらいから社会的微笑が出てくる。ところが、その後、ヒトはさらにどんどん笑いを発達させていくのに対して、チンパンジーは身体をくすぐってもらおうとプレイフェイスといって笑いに近い表情が出てくるものの、自発的に笑うということとはなくなる。

また呼応の発達についても、ヒトもチンパンジーも生後 3 ヶ月目ぐらいになると、周囲の大人に呼びかけるようになり、逆に大人が呼びかけると、それに応えるようになる。ところが笑顔の発達と同様、チンパンジーの場合、6 ヶ月過ぎぐらいになると急速に消えてしまい、こちらがどれだけ呼びかけても応じなくなる。

以上は比較的類似した発達の特徴だが、両者の比較によって明らかになったヒトのみに認められる知性についてまとめると、まず物を指さすという行動が挙げられる。チンパンジーは突起物やボタンなど指先を物に接触させるような指さしはするが離れた物を指さすことはまったくない。これに対してヒト乳幼児は指さしを始めると同時に離れた物も指さすようになる。またヒトは指をさされた方向を見ることができるが、チンパンジーは指が

さされた方向を見ることができない。

さらに他者に視線を向けて承認を求めるという行動や他者との物のやりとり、模倣といった行動もヒトのみに認められる特徴である。

これらを成立させている基盤として、3 項関係の成立というものがある。ヒト乳幼児が「自分」と「物」と「他者」の関係を成立させて認知機能を発達させていくのに対して、チンパンジーはこれら 3 つの項目を並列的に処理することが困難なのかもしれない。

平成 22 年 1 月 8 日

近代日本の民間の調理教育からみた女性と仕事

― 笹木幸子の執筆活動を通して行った調理教育 ―

専任講師 今井 美樹

食に関わる仕事と性別役割の習慣は古くからあり、調理をめぐる、男女役割（習慣）はさまざまに変化している。発表者は、これまで日本の「近代の民間の調理教育」という分野をジェンダー（社会的・文化的性差）視点で分析した研究を行ってきた。すでに研究で明らかにしたように、ジェンダー構造をもった調理教育の中で育った女性の中に、調理能力を職業能力として発揮した女性がいた。

本研究発表では「近代日本の民間の調理教育」に関わったすぐれたひとりの女性、^{ささき ゆきこ} 笹木幸子とその仕事について報告する。笹木は日本女子大学校の教員として女性の学校教育における家政教育の調理教育に携わった女性の調理教育者のひとりである。

本研究の目的は、第 1 に、笹木幸子の執筆活動を通して行った調理教育の特徴を明らかにすること、第 2 に、執筆活動を通して、笹木幸子が調理教育者として日本全国に届けたかったメッセージ・情報・技術を明らかにすること、第 3 に、近代日本の女性が調理を仕事に生かしていくことの意味を明らかにすることである。研究方法は、資料をジェンダー視点で精査し分析を行い、考察することである。資料は、①食に関する専門雑誌『料理の友』（第 1 巻―第 28 巻）323 冊、②著書『年中行事家庭儀式料理』（1911 年刊行）、『家庭料理献立集』（1914 年刊行）、③通信教育の講義録『家庭料理講義録』（1913 年―1922 年）29 冊を用いている。

結論として、笹木幸子の執筆活動を通して行った調理教育では、以下の 3 点の知見が得られた。第 1 は、笹木幸子が当時の女性たちの中で、抜群に有能な女性の調理教育者であった点である。笹木の執筆活動を通して行った調理教育は、『料理の友』と 2 冊の著書、『家庭料理講義録』の執筆活動に限定していえば、通信教育の講義録の執筆を除き、日本女子大学校家政学部卒業後の 1905 年から結婚した 1916 年までのおよそ 11 年間に行われている。結婚後は、学校教育における調理教育の活動と同様、民間の調理教育における活動もみられなくなっている。このことは、当時としてはごく当たり前のことであったかもしれないが、抜群の調理能力を職業能力として発揮できるレベルにあった女性の活躍が結婚によって阻まれたことを意味している。第 2 は、笹木幸子の執筆活動を通して行った調理教育は、学校教育における女子調理教育観を基盤に行われていることである。笹木が雑誌『料理の友』において調理教育者として日本全国に届けたかったメッセージ・情報は、笹木が日本女子大学校において学んだことであり、それを普及するべく行われている。特に、一家の主婦が家族の食事作りのための調理に「主婦自らその任務に当たる」ことは家庭・国家・健康・経済の上から重要な責務であると考え、家庭で毎日の料理を担当するのは「女性の役割」であることを笹木は認識している。第 3 は、限られた一部の女性であるが、調理に関する知識・技術・能力が、当時の社会において、女性が職業的に活躍できる力となっている点である。笹木が活躍しているのは主として家庭の日常料理であるが、単に各家庭の現実の食生活を写すものとしてではなく、料理人のもつ技術を基本として和洋折衷で発案されていき、おそらくは女性たちによって新しくつくられた惣菜料理や、美味しく食べるための技術の工夫であったと思われる。

平成 21 年度 大学院人間教育学専攻 修士論文題目一覧

○授業力・学校力の向上を目指す理科教育経営	井 上 文 敏
○子どもの自然認識の構造と構成に関する研究	
ー自然認識の構成を促す理科授業のデザイナー	佐 藤 慎
○子どもの自然認識を広げる探究的な学習のあり方	白 敷 哲 久
○高等学校における道德教育の研究	
ーシュプランガーの青少年教育理論をもとにー	醍 醐 身 奈
○幼稚園における保育者と子どもの関係性の構築について	
ー援助の本質と援助の実際ー	亜 森 瑪依拉

平成 21 年度 初等教育学科 卒業論文題目一覧

○オペレッタの中にみる子どもの表現活動	秋 元 優 香
○自然素材を使った造形活動における幼児の造形的表現の実態と、望ましい造形活動の支援方法の研究	飯 村 尚 子
○小学校における生活科と理科の関連を重視したエネルギー概念の育成	
ー第 3 学年「風やゴムの働き」の単元を事例としてー	市 村 公 美
○小学校低学年における学級集団づくり	
ー特別な教育的支援を必要とする児童と学級集団との関わりー	内 海 みゆき
○統合保育における応用行動分析の導入	小 野 倫 子
○社会科の問題解決学習における知識習得について	小野寺 睦
○いじめや少年犯罪に歯止めとなる力を育てる道德教育	表 愛
○小学校における体育に関する研究	
ー実技の苦手な子どもに体育の「楽しさ」を教えるー	加 藤 亜希子
○幼児の造形表現における砂遊びの意義と効果的な保育方法の研究	
ー砂遊びと子どもの発達と人間関係に視点をあててー	金 澤 麻 未
○国語科における児童の関心を高める授業展開の研究	河 澄 藍 子
○国語科における読解力の育成	菊 池 恵 美
○情報モラル教育における授業研究 ーケータイ教材を活用した授業ー	熊 谷 まり子
○日本の子守唄の研究 ー歌詞と音楽の分析を通してー	熊 田 洋 子
○幼児の遊びと発達の関係性 ーごっこ遊びの探求を通してー	雲 谷 悠
○幼児期の文化についての考察	
ー幼稚園における「折り紙」教材を通してー	桑 原 碧
○小学校英語教育の現状と、外国語活動の授業の在り方について	慶 長 智 子
○小学校特別支援学級における発達障害児の支援について	小 池 美 鈴
○学級集団におけるよりよい人間関係づくり	
ー集団ソーシャルスキル・トレーニングを通してー	佐々木 美 恵
○子どもの思考を重視した小学校理科教育の授業研究	佐 藤 綾

○幼稚園の「お帰り」に関する考察 ―「今日」から「明日」への関係―	佐藤 有希
○公德心の土台となる道德心の育成	霜島 彩乃
○ごっこ遊びの構造 ―5歳児の遊びを通して―	関根 恵
○物質概念の形成を重視した小学校理科の授業研究	田澤 恵理子
○集団づくりのための対人関係ゲームに期待される効果	
―参加者は何を体験したか―	常住 知美
○子育て支援の現状と課題 ―実践を通しての考察―	鶴田 明衣
○子育て支援の発展的プログラム ―現状と課題からの考察―	富樫 梨紗
○幼児期の遊びの特徴 ―遊びの種類・遊びのプロセスからの研究―	長尾 伊織
○新聞教育がもたらす教育的効果に関する研究	
―学級新聞の制作過程における児童の言語活動に着目して―	長岡 有紗
○乳児のことばの獲得のプロセス ―母子関係を通しての探求―	長澤 みなみ
○乳児期のコミュニケーションによる発達過程	
―「言葉」と発達の関係から―	西村 舞
○フィンランドの初等教育を日本の初等教育にどのように生かすか	
―「本の紹介カード」を活用した読書活動に着目して―	野呂 菜摘
○幼児教育における自然体験のあり方	日向 紋楠
○小学校体育科における一人一人に応じた指導の研究	細谷 花衣
○幼稚園における保育環境の検討	
―子どもの生活に適した環境を考える―	牧野 仁美
○小学校遊具に関する研究 ―鉄棒などの固定遊具の効果―	宮平 冴枝子
○算数科における活用力を育成するための授業の研究	武藤 夏子
○特別な教育的支援が必要な児童への支援員としてのかわり	
―担任との連携と児童理解―	村田 麻美
○体育好きの子どもを育てるための研究	村中 智香
○幼稚園における“気になる子”の保育について	
―保育者や介助員のかかわりを通して―	森井泉 知恵
○子育て中の親が、より魅力を感じる子育て支援センターづくりへの提言	矢野 美由紀
○PISA 型読解力を活かした読解指導	
―わが国の従来の読解指導をふまえて―	山形 早貴子
○幼小連携における幼児と児童の交流活動	
―「なめらかな接続」への一考察―	山村 真穂
○国語科における言葉遣いの指導について	横田 菜津美
○書と子どもの創作活動の研究	吉岡 舞子
○通常学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童について	
―多動と集団活動への不適応を抱える児童への支援の検討―	吉田 衣里
○通常学級における発達障害児への支援と配慮について	鎌田 実来
○算数科における思考力・表現力を育成する授業の在り方の研究	田中 愛
○音楽科と他教科とのかかわり	矢地 ひとみ